

老視

KEY WORDS

- 老視
- 疫学
- 薬物治療
- 多焦点眼内レンズ

Presbyopia.

Kazuno Negishi (教授)

慶應義塾大学医学部眼科学教室 根岸 一乃

はじめに

老視とは、加齢に伴う水晶体の弾性（外力によって変形した物体が、その外力が除かれた時にもとの形に戻ろうとする性質）の低下を主とした変化によって、眼の調節力が低下して近方視が困難になる状態を指す。多くの場合40～45歳頃に症状を自覚し、50歳代の間に調節力はほぼ失われる¹⁾。本稿では、老視の定義、疫学、治療（眼鏡、コンタクトレンズ以外）の現状について概説する。

I. 老視の疫学と社会的影響

2000年には、世界の老視人口は14億人（人口の23%）であったが、2015年は18億人（人口の25%）で、そのうち8億2,600万人が適切な矯正を受けていないために近見障害となっていると推定されている¹⁾。人口増加と平均寿命の延伸によって2030年には老視人口は21

億人となってピークに達するが、2050年には19億人（人口の20%）に減少すると推定されている¹⁾。

健康な成人において、未矯正あるいは低矯正の老視は生産性の低下の原因となる可能性がある。Frickらによると、医療費がより高額で不平等性の低い先進国の都市部では適切な老視矯正が行われていることが多い²⁾。たとえば、北米国の高所得地域、オーストラリア、西欧州、アジア太平洋の高所得地域などである。一方低所得の国では未矯正または低矯正の老視患者が存在し、経済的に大きな影響を与えていると推察される。Frickらは未矯正または低矯正の老視により2011年に失われた生産性を試算した²⁾。それによると2011年には世界で12億7,200万人の老視患者がいると推定され、50歳未満で未矯正または低矯正である2億4,400万人は110億2,300万ドル〔世界の国内総生産（Gross Domestic Product：GDP）の0.016%〕の生産性の損失に関連していた可能性